

「ハイ、毎度御邪魔ぢやが、一幕見せて貰ひたい」

「コレ、關取がお越しになつた善い場へ御案内申せ」

「ア、相撲取は體格が大きいので徳やなア、こんな大芝居無錢遣入れる、私はなんで斯んなに小さう産れたんやろ、けども彼の人も人間なら、私かて小さうても人間や、彼の人が無錢切れて私が切れんと云ふ事があるもんか、ヒトツ無錢切つてやろ」

とチヨコくと木戸口へ這入つて來ました。御承知の通り芝居の木戸番は、高い所に坐つて居りますので這入つて來た人の胸の處へ手が行く様に成つてます。小さい男が這入つて來たので、何處へ行くのやと胸を突かうとしたが、小さいので手が胸へ届きません、頭の上で、すかを喰ふて轉こんで落ちました。

「ア、痛やの、ア、痛……」

「モシ、大木戸如何しなはつたんや」

「今ナ、小さい奴が無錢切りよつたんで、胸を突いて遣ろと思ふたら、スカタンを喰ふて落ちたんや」

「小さい奴と云ふたら子供だすか」

「イヤ、大人や」

小さい男チヨコくと中へ這入つて彼方此方見ると、重箱の置いてある處が開いて居るので、重箱の

上へチンと坐りました。

「ア、モシ貴方、ソナ無茶をしたら不可ん、ソレは私しの辨當やがな、重箱がつぶれますで……」

「大丈夫だす、チヨツトの間拜借します。煙草の火をヒトツ貸しとくなはれ」

「サア〜おつけやす」

「イヤ大きにありがたう。まだ幕は開きまへんか」

「まだだす」

小さい男、我れを忘れて大きな聲で「オイ幕開けてや」と云ふたので、直ぐ見付けられた。

「コラ、小さい身體をしやがつて生意氣な奴や、此方へ來い。大木戸此奴だつたか、如何にしまへう」

「表へ投り出せ」

「へエ、宜しうおます」

と首筋をつかんで、表へホイと投り出しましたが、餘り力も入れなんだが、對手の身體が軽いので、クル〜と舞ひ上つて前茶屋の屋根を越えて、道頓川を越えて向ふ側の塵芥場の裡へ、ドスンと落ちました。拍子の悪い塵芥の取り立て、中々深いので掻き登れまへん。其處へ何處の女婢か、塵取りに三杯も塵芥をブチ明けたので、塵芥の下敷になつて挟み虫見たいになつて居ります。其處へ紙屑拾ひが竹の先に釘の付いた、あれを仲間では出雲と云ふさうで、何でやと云ふと紙(神)を寄せる